

思い出を語る場を作る取り組みから

野島 久雄¹・新垣 紀子¹・永井 由美子²

成城大学¹⁾ 多摩美術大学²⁾

1. はじめに

私たちにとって、過去の思い出が大切であることは言うまでもないことだろう。私たちは、今ここにある自分が何者であるかを語るために、思い出を語り、自分がどのようになろうとしているかを説明するために過去を語る。近年、こうした思い出に関する取り組みが広がりつつある。たとえば、黒川 (2005) は、思い出を語ることが認知症のリハビリに有効なことを示している。また、山下・野島 (2001) は、思い出が持つコミュニケーション機能をとりあげ、「思い出コミュニケーション」と名付けている。

私たちは、その思い出を語ることの持つ意味をさらに検討するために、思い出を語り、記録し、保存することを目的としたいくつかの取り組みを行ってきた。ここでは、その取り組みを通して見えてきたことをまとめ、今後の研究の方向性を確認したい。

2. 思い出を語る取り組み

(1) 3D のデータとビデオによる語り

2003 年の NTT-ICC における「記録と表現」の一つの取り組みとして、「思い出の蓄え方」という展示を行った。これは、NTT マイクロシステムインテグレーション研究所の松岡裕人氏と協同で、参加者の思い出の品を持ってきてもらい、それを 3D キャプチャー装置で 3 次元データとして取り込むと同時に、それがなぜ大切なモノであるのかについて語っているビデオを展示したものである。

(2) 成城大学学びの森における取り組み

2006 年度から、成城大学の社会人向けのコミュニティスクール (春と秋に各 5 回程度の講義として開催される) に、思い出の心理学というテーマで、思い出に関わる取り組みをこれまでに 3 回開催している。参加者の多くは、大学の近くに住む社会人であり、60 歳代以上の方が過半を占める。

a) 地図上に思い出を貼るプロジェクト (2006 春)

参加した 30 歳代から 70 歳代までの人たちが、それぞれに持っている大切な思い出を一つ選び、一つのパネルに写真とともに書き込んだ。そして、それを成城の街の地図上の関連するポイント (同じ場所

に所在する小学校であることもあり、近くの公園であることもあり、また公開講座が開かれた大学であることもあった) の糸で結んだのである。パネルに書かれていることはさまざまである。この学園の卒業生であるメンバーの一人が自分の同級生の家を地図上にマッピングしたもの (写真右上)、宅地の再開発で切り倒されてしまうヒマラヤ杉の写真、戦争の時の食糧事情を思い出してならべた野菜の写真。この街とは関わりのないアメリカでの留学生生活を思い出してよく聞いた CD の写真を貼ってくれた人もいた。個々の思い出は特に関係がない。相互に関連がないというだけでなく、実はこの街にも関係がないものさえもある。



b) 8 枚のカードで示すストーリー (2006 秋)

自分の思い出をライフトレースカードという多摩美の佐藤翔子さんが作ったカードに 1 枚の写真とともに記録するのである。そして、そのカードを 8 枚横に並べて、自分のストーリーを作った。その 8 枚のカードを蛇腹状につなげて、小冊子の形にしたのが下に示したものである。写真の中には、自分の生まれた年 (1930 年代) に作られたライカのカメラがある。その方は、このカメラを大切にを使ってさまざまな記録を残されてきたという。70 歳代の方が持ってこられた鉱石標本の写真もあった。戦争中、他におもちゃがなかったところに父親が買い与えてく

れたこの鉱石見本をこの方は大切にしていたという。これらの写真は、最終的には小冊子として個々人に戻されたが、作



成する過程では、メンバー同士での写真の説明や、そこから派生する話題が多く交わされている。

c) 年表カードで語る自分の人生 (2007 春)

最年長の参加者が 1932 年生まれの方だったので、1932 年から 2007 年まで、毎年の出来事を 1 枚のカード (ポストイット) に書き、横に長いパネル上に貼った。これによって、それぞれの参加者の相互のつながり (ある人が生まれた年には、もう一人の人は学校の遠足で富士登山をしていた) が見え、さらに人生の長さ (最年長の方は、最年少の 20 歳の参加者の 4 倍近くの長さを要する) を可視化することができた。

3 思い出を語る場から見いだされたこと

まだ事例としては数が不足しているが、現時点でも明らかになっていることがいくつかある。一つには、思い出を語る場は、それ自体が楽しい場でありうるということである (もちろん、いつでも・誰にとっても楽しいということを目指したものではない)。しかしながら、それと同時に、参加者の多くは、なぜこの場で個人的な思い出を語り、なぜそれをインターネットで (あるいは、公の場に展示することによって) 他者に公開しなければならないのかを問う・問われることになる。これまでの経験から得たことをまとめると、(a) 思い出は単に語ればよい



のではなく、語るための方法論が重要であること、(b) 思い出を語る場に参加することはプライバシーの一部を放棄することにつながるが、それを前提にはならない、(c) しかしながら、公開したときに、第三者が (あるいは、未来の自分が) 見て納得する程度の質を維持する必要がある、ということである。

4 今後の課題

思い出を語る場が参加者にとって意味のある場となり、また、認知科学の研究として (記憶・感情・思い出の価値、他) として意味のあるものとするためには、今後どのようなアプローチを取るべきなのだろうか。これまでの経験から、次の 3 点についての観点を明確に持つことが重要であると考えます。

[1] エンタテインメントとしての質を向上させる：思い出の記録がそれ自体として鑑賞の対象となり、他の人に見せてもよい、自分で後で再度鑑賞したいと思えるような作品としてまとめることが必要である。これは必ずしも公開を前提としない。また最先端の技術を必要とするものでもない。

[2] メンバー間の関係の重要性：多くの場合、思い出を語る場は、自分の人生を振り返り、自分の価値観を表明する場となる。その場合、場を構成する他者は聴き手であると同時に、話を引き出すファシリテータとなる。そうした関係がない場合は、場がうまく成立しない。

[3] 記録としての価値：必ずしも語られたものは公開されるとは限らない。しかし、語られたものは結果として公的な側面を持つことになる。従って、語りのテーマは公開しても意味のあるようなものであることが望ましい。

5 終わりに

現時点では、私たちの思い出を語る場を作る取り組みは、まだ予備的なものにとどまっている。しかしながら、世代を超え、大学と地域をつなぐ知のアーカイブプロジェクトとして、今後とも展開させていきたいと考えている。

参考文献

黒川『回想法』誠信書房、2005

山下・野島「思い出コミュニケーションのための電子ミニアルバム」HIS2001

謝辞：成城での取り組みを行うに当たってさまざまなアドバイスをしてくれた佐藤翔子さん (Yahoo Japan) に感謝する。